

## 巻頭言

名古屋学芸大学健康・栄養研究所  
所長 下方 浩史

コロナ禍が広がって3年目となりました。日本ではオミクロン株が猛威を振るっています。コロナ禍のため、計画していた研究活動が思うように進まなかった研究者も多かったと思います。しかし、研究者の皆さんのご協力で、今年も健康・栄養研究所年報の第13号を無事に発刊することができました。

本誌は名古屋学芸大学健康・栄養研究所の研究や実践活動の成果発表の場であるとともに、その成果を広く社会に知っていただくために発刊を続けています。2009年から、本誌は医学中央雑誌データベースに定期刊行物として収録され、医中誌 Web でも検索できるようになっています。第13号では原著3編、報告3編の計6本の論文を掲載しています。

原著では「管理栄養士養成課程における選択科目の食物アレルギー教育による学習効果とコンピテンシーの変化」、「愛知県豊田市の在宅医療における管理栄養士の役割に関する現状調査」、「新型コロナウイルス感染（COVID-19）予防ガイドラインに準じた常滑市低栄養重症化予防事業（常滑市栄養パトロール）の評価」と、栄養教育や現場の管理栄養士の活躍について貴重なデータがまとめられています。報告では「HACCP の考え方に基づいた衛生管理の実践」研修報告、「2021年度食の安全・安心タウンミーティング」報告、「健康支援型配食サービス事業推進を目的とした食育弁当の開発と事業プログラムの提案」と、実践活動や研修が報告がされています。

今年も、「栄養」と「食」に関する論文が多く集まりました。「食」は健康に密接に関連しているとともに、文化や環境にも関わっています。国連サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）も、「食」が大きな部分を占めています。研究所からの研究成果や実践活動が、私たちの健康だけでなく、地球の環境を守っていくことにつながることを願っています。